

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	中野区東中野 3-12-2
園名	東中野しらゆり保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

様々な遊びを楽しむ中で、体の様々な動きや姿勢を伴う遊びを繰り返し楽しむ。

<テーマの設定理由>

目の前にある素材、遊具、玩具などに手を伸ばした子どもたちから発せられる問いに対し、子どもたちが主体的に環境に関わり、遊びへの興味・関心を広げ、探求を繰り返しながら「できた」という自己有能感及び喜びを獲得していく。

2. 活動スケジュール

活動内容	時間/回	人数/回
1 歳児		
ムーブメント教育・療育	30分/2コマ 月2回	6人/1コマ
2 歳児		
ムーブメント教育・療育	30分/2コマ 月2回	6人/1コマ
3・4・5 歳児		
ムーブメント教育・療育	60分/週1回	15人

指導者が入って行うムーブメント教育・療法の中で、巧技台を使用し、バランス感覚を養う遊びを一人ひとりが興味・関心に応じて探求していく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・ムーブメント指導者が週 1 回来園していただき、ムーブメント道具（形板、スカーフ、カラーロープ、フープ）を使用して室内にサーキットを設定する。
- ・ムーブメント道具（パラシュート、ビーンズバッグ、ハットfrisビー）を室内に設置する。
- ・巧技台（はしご、ビーム、すべり面、跳び箱）を使用して室内にサーキット設定し活動する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

巧技台を導入するにあたり、使用方法上の危険度などから子どもたちと考え、幼児クラスは、サーキットの流れを企画する。巧技台のみならず、他のムーブメント用具と組み合わせサーキットを作る。また、自分たちで考えたサーキットにおいて、身体をどのように使うことが、自らの運動能力に適しているのかを子どもたちは一人ひとり、探求していく。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

サーキットが設置されると、子どもたちは自ら道具に近づき、「これやりたい」「どうやるの?」と興味を示す姿が見られた。はしご状の巧技台に足をかける際には、慎重に体重を移動させながら進み、「ゆっくりならできる」「手をついたらいけた」と自分なりの方法を見つけていく様子があった。初めはバランスを崩していた子どもも、繰り返し挑戦する中で姿勢を整え、「もう一回!」と自ら挑戦を重ねる姿が見られた。また、「ここ、気をつけて」「先にどうぞ」と友だちに声をかけ合う姿も増え、安全について子ども同士で確認し合う場面もあった。幼児クラスでは、「ジャンプしてからくぐるのはどう?」「こっちにフープつなげたら?」と意見を出し合いながらサーキットを構成する姿が見られた。保育者はすぐに方法を示すのではなく、「どんなふうに使おうと安定するかな?」「どうしたら安全にできるかな?」と問いかけ、子どもが自分の体と向き合う時間を大切にしたい。活動を通して、「できた」「ちょっとよかったけど、やってみた」といった言葉が自然に聞かれるようになり、身体を動かすことへの意欲と自己肯定感の高まりが感じられた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

巧技台やムーブメント用具を取り入れた活動は、単なる運動能力の向上にとどまらず、子どもが自ら考え、試し、調整する“探究の場”となっていた。繰り返し取り組む中で、子どもたちは自分の体の使い方や得意・不得意に気づき、「どうすればできるか」を模索する姿が見られた。また、危険についても大人から一方的に伝えるのではなく、子ども自身が考えることで、安全への意識も高まっていった。指導者と担任が連携しながら環境を整えることで、子どもが主体的に関われる活動へと発展していったことは大きな成果である。今後も、体を動かす楽しさを基盤としながら、一人ひとりの挑戦を支える環境づくりを継続していきたい。